

総合情報基盤センター外部評価報告

只木進一*

1 はじめに

総合情報基盤センター（以下、「本センター」という）では、改組前（法人化前）の学術情報処理センターの頃より、毎年の自己点検評価に加えて、4年ごとに外部評価を実施することとしている。平成22年度は外部評価の年度にあたり、平成23年3月14日に外部評価を実施した。

平成22年度の外部評価委員は、以下の方々に依頼した（50音順）。

中野裕司 熊本大学総合情報基盤センター長

西村雄一郎 株式会社デジタルコミュニケーションズ佐賀代表取締役社長

稗田 隆 岡山大学情報統括センター長

前田香織 広島市立大学情報処理センター長

外部評価委員会では、本センターの活動全般についての説明に続いて、質疑応答を行い、本庄メインセンター及び医学サブセンターの見学の後、総括質疑を行った。

2 外部評価委員会概要

日時:平成23年3月14日14時半から18時

場所:学長補佐室及び医学部小会議室

進行次第

1. 開会挨拶（只木センター長）
2. 総合情報基盤センター概況説明（渡邊副センター長）
3. 質疑応答
 - セキュリティポリシー
 - 中期計画との関わり
 - 委員会等の構成
 - センター運営体制
 - メール外注
4. 本庄メインセンター見学

*総合情報基盤センター長

5. 鍋島キャンパスへ移動
6. 総合情報基盤センター-医学サブセンター概況説明 (竹生副センター長)
7. 質疑応答
 - 病院内への各種通知
8. 医学サブセンター見学
9. 講評
 - 情報リスクマネジメントの必要性
 - 業務の継続性、特に属人性の高い業務の問題
 - 研究と業務の連携の良い面と悪い面
 - 両キャンパスのシステム・業務の差によるコスト
 - メール外注への評価
 - 広報は誰をターゲットにしているか
 - 広報の役立て方
 - 目玉サービスを主張する

3 評価概要

各外部評価委員には、それぞれに評価報告書の提出をお願いし、別添のように提出をいただいた。ここでは、質疑応答を含めて、主な評価・指摘事項の概要を述べる。

1. 今回で4回目となる外部評価、毎年度実施している自己点検評価について、継続性だけでなく、これらの評価を通じて、問題点を発見し、改善に結びつけている点を評価していただいた。これらは、本センターに限らず、本学の各組織に共通する点であると考える。
同時に、自己点検評価や外部評価で改善を要する点のなかで、業務の棚卸、属人性の減少、センター業務の範囲に関する法人側との調整など、十分に改善が進んでいない点もあることを認識しておく必要がある。
2. 本センターの業務について、センター長、併任の副センター長、専任教員、技術職員、および事務職員が一体となって運営していることを評価して頂いた。教学組織と事務組織の連携が一般には難しいことも事実である。しかし、本学の場合、教学用情報システムと事務情報システムの連携が進んでいるため、教学組織と事務組織との協力に基づく運用体制でなければ運用できない。一層の連携・協力強化が必要である。
3. シングルサインオン化した利用者認証ネットワーク opengate やシンクライアント導入など、先進的情報システムの導入と運用を評価して頂いた。一方で、二つのキャンパスのシステムの整理が十分に進んでおらず、運用コスト増を招いているとの指摘もあった。
4. シングルサインオンの導入やメールの外注化など、サービス向上への継続的取組も評価いただいた。ただし、コスト面での課題の指摘もあった。

5. 本センターでは、研究と業務を連動させることで opengate 等の成果をあげ、これが本センターの大きな特色となっている。この点についても高い評価を頂いた。
6. 研究と業務の連携や、様々な特色ある取組は、それを担っている人に強く依存している。このような人に依存した取組は、一方で、その人が担当できなくなった場合に継続が困難というリスクをもっているということでもある。この点についての指摘を頂いた。
7. 情報基盤が大学の教育、研究だけでなく、組織運営や診療の基盤となるとともに、セキュリティレベルの維持が必要となっている。本学では、早い時期からセキュリティポリシーを制定しているが、実効化するためのセキュリティマネジメントシステムを有していない。ISMSの導入等を検討する必要性の指摘を頂いた。
8. 本センターにおける地域貢献として、県の審議会等を通じた情報化支援が中心となっている。それ以外の地域への技術支援の具体的内容が無いという指摘があった。今後の検討課題である。

4 まとめ

最初に、外部評価を実施していただき委員の皆様には感謝いたします。短い時間でしたが、私たち総合情報基盤センターの活動内容を理解頂き、適切な評価及び指摘を頂くことができました。資料作成や会場準備などで協力いただいたセンター及び情報企画室のみなさんにも感謝いたします。

外部評価の結果は、概ね良好であったと思います。私たちが考えている総合情報基盤センターの特徴と強みを評価して頂きました。同時に、これらの特徴と強みと表裏一体であるような属人的サービスなど、課題の指摘を頂きました。課題については、改善に向けて取組を進めていきたいと考えています。

外部評価報告書

平成 22 年 4 月 28 日
熊本大学総合情報基盤センター
センター長 中野 裕司

1 はじめに

2011 年 3 月 14 日開催の佐賀大学総合情報基盤センター外部評価委員会に参加し、同センターの概要の説明をいただき、続いて、メインセンターと医学サブセンター各々において、その特徴の解説と見学の機会をいただきました。本報告書は、委員会での説明およびその後の質疑・見学を通じ、外部評価委員として、気付いた点を報告させていただくものです。

2 概要

佐賀大学総合情報基盤センター(以下、センター)は、全体としては非常に良好な状態で運営されていると考えます。

特に評価したいのは、センターの業務と研究が密接に関連し、お互いに高めあうことで相乗効果を上げ、そのことが、全学の学生、教職員といった利用者の利便性に直結しているところです。佐賀大学といえば、情報セキュリティおよびネットワーク管理を一元化した Opengate システムの研究開発を思い浮かべる IT 関係者も多いかと思いますが、その研究が、直接的であったり間接的であったりはしますが、シングルサインオンの構築、国立情報学研究所の認証連携フェデレーション「学認」へのいち早い参加と貢献、全学無線 LAN の統一認証、メールシステムの外注、教育用端末としてシンクライアントの導入等へとつながり、それらの連携もとれて利便性の高いものになっていると思います。

また、事務部との密接な協力体制のもとで、常に大学運営を見据えて戦略的に情報化の推進に取り組まれているところや、大学統合に伴う2つのセンターの統合的運用と臨機応変な機能的個別対応も高く評価されると思います。

一方、センターの担うべき業務の増加に伴い、センターの組織としての”余裕”がなくなっていることも、質疑を通じて見て取れました。このような視点に立ち、いくつかの点を課題として報告させていただきます。

3 課題

まず、以下に挙げます課題に関しては、佐賀大学に特有な課題というより、全国の国立大学法人にある程度共通に存在する課題と言えるものです。その意味からも、センターの運営状況がいかに健全かつ良好であるかを意味していると思います。共通課題ではありますが、このように優れたセンターであるからこそ、先陣を切って問題解決に取り組んでいただけることを期待します。

欧米の先進事例に見られるように、これからの時代は、情報化戦略の如何が大学の運営に大きな影響を与える時代にますますなっていくと思われまます。このような中で、センターが事務組織

等と連携して、大学の情報化戦略に貢献されているのは素晴らしいことだと思います。今回のご説明等から、現在のセンターの教職員の方々が、それを可能にする高い能力を持った上で非常にアクティブに行動されていることが、大きな要因と感じました。また兼任教員の方々が、形式的にはではなく、責任を持って実質的に運営に寄与されていると感じました。

しかし、その定員は決して十分とは言えず、属人的な部分があるということも歪めないと思います。例えば、現在の教職員の方が万が一突然業務が出来なくなったとした時に、どの程度のダメージがあるのか、また、将来的に、現在のセンターとしてのパフォーマンスが継続的に継承可能か等考えると、組織のさらなる整備や拡大の必要性を感じました。

情報化は教育・研究・管理・運営に深く結びついているため、大学執行部、事務組織、各学部・研究科の教育・研究、全学教育、その他図書館やeラーニング等の情報化に深く結びついた全学組織等を、どのように連携し、その中でセンターがどのような立場で中長期的に運営されるのがよいのかといった、全学的な視野にたった組織構成や運営形態が望まれ、それは他大学のよいモデルにもなると思われま

す。人的、財政的リソースが十分とは言えない中、組織としての経営戦略をも考慮にいたした、メールシステムの外注化等の効率化に取り組まれている点は高く評価できると思いますが、2つのキャンパスが地理的、歴史的に距離がある点等も含めて、ネットワークや情報技術の活用によって、さらなる効率化と利便性の向上の望める余地もあるように見え、今後どのように取り組まれていくのか楽しみにしています。

4 まとめ

現在のセンターは、非常に良好な状態で運営されていると言えます。業務と研究が非常にうまく連携し、その相乗効果が、全学の学生、教職員といった利用者の利便性にも直結しており、高度なセキュリティ、シングルサインオン、全学無線 LAN 共通認証、メールシステムの外注、教育用端末のシンクライアント化等に実を結んでいると思います。事務部との協力体制による大学としての戦略的な情報化推進や2センターの統合的運用も高く評価されると思います。

人的、財政的に十分恵まれているとは言えない中で、現在の良好な運営を支えている大きな要因として、社交辞令ではなく、現在の関係教職員の優秀性が挙げられると思います。逆の言い方をしますと、ある程度属人的な部分があることになり、これをあえて課題としてを挙げさしていただきました。今後のセンターに期待することとして、この非常に良好な運営状態を中長期的に持続可能にする、全学的な視野にたった組織構成や運営形態の構築があります。佐賀大学及びセンターは、それが可能な組織だと思いますし、その成果は他大学のよいモデルにもなると思われま

外部評価報告書

平成23年3月25日
株式会社デジタルコミュニケーションズ佐賀
代表取締役 西村龍一郎

1. 前提

本報告書は事前に送付された資料類を通読し、かつ、平成23年3月14日に開催された外部評価委員会において佐賀大学総合情報基盤センター(メインセンター, 医学サブセンター)責任者の説明を受けるとともに施設見学した知見をもとに、外部評価委員として気づいた点を記すものである。

2. 概要

佐賀大学総合情報基盤センター(以下、センターと記す)は、全体的には良好な状態で運営されていると考える。

人的資源が十分でないにもかかわらず、多種多様な利用者およびシステムのネットワーク環境や実習施設をスムーズに統合運営されていることは高く評価できる。

また、Shibboleth によるシングルサインオン技術の研究開発をすすめ実装していることは、人的資源の不足を補い、かつ、研究と実践という学術的活動としても特筆に値する。

一方、情報セキュリティマネジメントの観点からは若干の脆弱性を感じた。また、センターのミッションである「地域情報化の技術支援」に関しても再検討すべき時期が到来していると感じた。詳細は、課題として以下に記載する。

3. 課題

事業法人においては、自ら情報資産を保有していない業態(ex. ネットワーク管理事業者)であっても情報セキュリティマネジメントシステムの必要性および重要性が高まっている。

具体的には、国際規格(ISO)や日本工業規格(JIS)に準拠したマネジメントシステムを導入することにより、企業は自らもしくは付随する情報資産の機密性、完全性、可用性をバランスよく維持し改善していくことを求められている。

センターは、情報資産を自らのものとして保有するわけではないが、情報資産が流通するインフラの機密性、完全性、可用性を“暗に”利用者から期待されている。人的資源が不足しており、運営予算も厳しい折、管理面への資源再配分を求めることは酷なことかもしれないが、事故が発生した際の影響を考えると少なからず準備をすべきではないかと思われる。

事業法人において採用されている ISMS:Information Security Management Systemなどを参考にした情報セキュリティマネジメントのガイドライン構築を検討されることを勧める。

また、センターが運用・運営するネットワークは、教員、職員、学生、研究者など利用者が多種多様で利用範囲も多様であることから、セキュリティポリシーも詳細化して制定すべきかもしれない。

センターの設置目的に、学内及び地域情報化の技術支援に関すること、という具体的項目がある。特に、地域情報化の技術支援、に関しては、現在と設置目的が制定された時代背景は大きく異なっており、目的通りにセンターが地域情報化にコミットしているとは考えづらい。

時代にあわせて、地域情報化の技術支援、の具体策を再考し地域に根ざす最高学府としてその責務を果たすべきではないかと思う。

4. まとめ

なにはともあれ、経営資源を上手くやり繰りして大規模なセンター事業を日々運営されていることに敬意を表したい。

しかし、最近の社会情勢を考えると、センターに求められる管理責任も増大していることが容易に想像される。まずは小事のうちに何らかの対策を練られることを期待している。

また、地域情報化に関与する者として、大学の情報基盤センターが地域社会において果たすべき役割を再考され、いち早く具体的活動に移されることを望んでやまない。

最後になりますが、センターならびに貴学のますますのご発展を期待しております。

以上

外部評価報告書

平成 23 年 3 月 18 日
岡山大学 情報統括センター
センター長 稗田 隆

1. はじめに

平成 23 年 3 月 14 日の、佐賀大学総合情報基盤センターの外部評価委員会へ参加させていただき、貴センターの概要説明を受けるとともに、センターの見学の機会を頂き有難うございます。

本報告書は、委員会における説明、及び質疑報告・見学を通じて、外部評価委員としての意見を記させていただきます。

2. 総合情報基盤センターの活動について

広報、外部評価など、少ない体制の中で非常に充実した活動を継続的に実施されていることは、センター職員一同の意識の高さを含め、日々の活動が確実に遂行されているものと判断いたします。

前回の雑駁だったとの指摘のあったマシン室環境も、ブレードサーバ等の導入による集約化等の対応により十分な改善が図られていると感じました。また、資料等の散在もなくよく整理されていましたが、マシン室の入退室管理等の面で、入室の履歴の保持等、物理的なセキュリティの強化を図る必要を感じました。

3. ICTシステムの構築について

教員の研究テーマ及び成果が、実際の ICT サービスとして実現される、研究と実用化が連携した活動を高く評価します。特に、認証関連のサービスは学内向けサービスとして提供するだけでなく、毎年の統合認証シンポジウムとして広く社会還元されている、優れた活動と評価します。岡山大学においても佐賀大学における研究成果を活用させていただいており、大変感謝しております。

4. 情報サービスの向上に向けた取り組みについて

教育用 PC としてシンクライアントの導入、大学生協提供の複合機による印刷サービスなど、他の大学に先んじた積極的な取り組みが行われていると思います。特に、何処でも利用可能な無線 LAN サービスの早期な導入によるサービス環境の充実、費用対効果も含めたメールサービスのアウトソース化などは、今後の他の大学の参考になる先見的な取り組みとして高く評価いたします。

一方で、利用者である学生、教職員の利用特性の分析、アンケートによる要望、課題の

吸い上げなども定期的に行い、さらなるサービス向上に向けたP D C Aサイクルの確立も進める必要があると思います。

5. 総合情報基盤センターの今後の活動について

国立大学法人化後、2期目の中期目標期間に入り、より大学の経営層への貢献、学生に対するI C Tサービス、情報リテラシ教育の充実など更なる貢献が情報系センターに求められるものと考えます。現時点で教員による学生教育等の充実した活動を進められていますが、人員的な補強も含め大学運営に対してはより積極的な貢献を進める必要があると考えます。そのための、新たな先進的な研究、開発の推進を期待します。

6. まとめ

毎年の自己点検、4年ごとの外部委員による評価を定期的に行われていることに関し、その苦勞を含め、確実な目標達成をされていると評価いたします。また、I C T基盤の整備、ユニークかつ先進的なI C Tサービスの研究、その導入に非常に優れた成果を展開されていると評価いたします。

上記以外にも図書館システム等を含めた幅広い活動を進められていますが、一方で産学連携に要求される技術の変化、大学経営層への貢献などこれまでとは異なるスキルも要求されることになるかと思えます。

佐賀大学総合情報基盤センターの今後の積極的な活動を期待しています。

外部評価報告書

平成23年4月1日
広島市立大学情報処理センター
センター長 前田香織

はじめに、日々の多忙な業務や研究の中で、外部評価を実施されていることに敬意を表したいと思います。以下に2011年3月14日に開催された佐賀大学総合情報基盤センター（以降、センター）の外部評価委員会に出席し、状況報告、施設見学、質疑応答を通して気づいたことご報告いたします。

1. 外部評価の体制

前回の外部評価の指摘事項に対して、外部平成21年度の自己点検・評価報告書において、講じられた対策についてまとめられていた。このように指摘事項、懸念事項を見直し、その対策のための具体的なアクションをとっていることは評価できる。このうち、電子メールのサービスの外注化については評価委員会の際に状況を説明して頂いたが、実際に運用コストの合理化が図れたのかどうか、別の問題が発生していないかについてはもう少し精査すべきだと感じた。

2. 情報基盤の整備、総合情報基盤センターシステムの運用

SINET4のノード設置やJGN2+の終了などネットワーク接続環境が変化中、大学のネットワーク利用規模を把握し、先の見通しも、もちつつ過大な見積もりをすることなく、合理的な形で外部接続や2地区の接続をされていると思われた。教育用システムも同様に安定稼働を重視したものになっていると思われた。

平成22年度に行われた2つの地区の機種更新は教育、研究、教務情報、事務情報など広範囲なシステムの更新、統合であり、仕様検討から構築まで大変な作業だったと思われる。特に2つの地区の大学構成員や利用内容の違いから、必ずしも2つの地区を共通的に運用できていない部分があり、人員も含めてコストがかかっているように見受けられた。2つの地区で情報基盤に求められる要求条件が異なり、完全に同様の運用をすることは難しいが、限られたセンターの人員等運用コストの中で対応するために、システムティックに対応できる部分を少しでも増やしていくことが望まれる。

3. 研究成果からシステム運用への発展

佐賀大学で開発された認証システム **Opengate** は関連分野の研究者の中でもその存在を知られるものであり、研究開発された成果を大学の運用システムに発展できていることは

高く評価できる。センターの教員も研究的なアウトプットとして求められるがそれに応え、さらに開発成果をセンターのアイデンティティをもつことができている素晴らしいことだと思う。

ただし、既に何年もの運用経験もあり、安定稼働しているとのことだが、研究開発に関してはセンターの現スタッフに依存している部分が多いので、今後の開発サポートをどのようにしていくは課題である。

4. 社会貢献、地域貢献

学外活動や地域社会との連携では自治体等の関連委員会の委員就任というような形の貢献が多いとのことだった。今後も同様に委員就任や技術的な支援などの要望が続くと思われるが、昨今、大学にも社会貢献や地域貢献を求められることが多く、センターの活動として高く評価されるべき項目だと思われる。

5. 広報

センターの広報誌「広報」の他、自己点検・評価報告書、外部評価報告書などセンターの活動を報告、広報する出版物やオンラインでの発行の充実度に驚かされた。この他にも、「利用者端末の紹介」のパンフレットや「創立 20 周年記念誌」の発行されている。このように充実した広報活動ができていることは同等の情報処理関連のセンター組織でも珍しいと思われるので高く評価したい。

総合的に、限られた人員やコストの中で、しかも、日々センターに対する要望が多様化する中で、センター長の指揮のもとセンターはよく運営されていると思いました。センターのスタッフの努力のあらわれと思います。個々のスタッフに個性に依ることなく、今後も安定的組織運営と先導的な教育・研究活動が続くことを期待しています。